



西条昇准教授
江戸川大学准教授。お笑い評論家。笑いと健康学会理事、過去に落語家からコミックバンド、喜劇俳優などを経て、数々の番組制作や書籍を執筆する。現在も芸能の研究をしながら、江戸川大学においては、お笑い・エンターテインメント論、マス・コミュニケーション演習・実習の授業を担当。2005年より江戸川大学選任講師、2010年から現職。西条ゼミの卒業生は芸能事務所、テレビ制作会社に多く就職している。



**江戸川大学
メディアコミュニケーション学部
マス・コミュニケーション学科**
マス・コミュニケーションを軸に、幅広く学際的な領域を包含。より専門性の高い学習ができるよう、
①イベント企画・町おこし/広告・広報 ②新聞・雑誌・文章力/デジタル編集/国際力養成 ③デジタルメディア ④放送制作といった4つの履修モデルから選択するシステム。

**江戸川大学メディアコミュニケーション学部
マス・コミュニケーション学科 西条昇准教授**

大学の研究最前線

アイドルとお笑いを学問する

■ 夢の世界に 実際に触れてみよう

テレビを観ている、アイドルやお笑い芸人などで好きな人やグループがいたら、その人、グループが出演するテレビをチェックするだけではなく、劇場などに足を運んでライブで楽しんでみましょう。テレビはメディアの一部でしかありません。興味を持ったエンターテインメントがあったら生で味わい、よく調べ、そのエンターテインメントの面白さをぜひ周りの人に伝えてください。とくに自分の好きなエンターテインメントについて、まったく興味のない人にその面白さを伝えることができれば、人の輪が広がり、コミュニケーションを図るきっかけにもなります。テレビなど手軽な方法で満足するのではなく、どんどん出かけて世界を広げてみてください。

■ 西条先生の著書

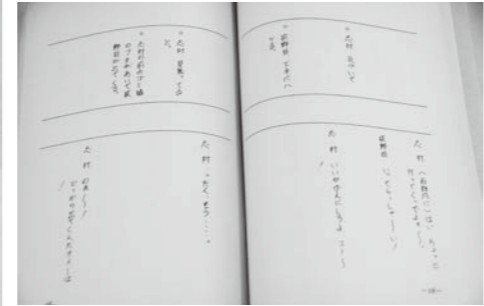


『お笑い研究所』・風塵社(左上)、『ジャーニーズお笑い進化論』・大和書房(右上)、『ニッポンの爆笑王100』・白泉社(左下)、『お笑い芸人になる方法』・書写社(右下)

■ 西条先生が脚本を担当したテレビ番組の台本



『タモリの音楽は世界だ』(左上)、『加トちゃんケンちゃんごきげんテレビ』(右上)、『ピートたけしのお笑いウルトラクイズ!!』(左下)、『ダウンタウンの大挑戦 復活! なつかしのヒット番組総まとめ』(右下)。



▲『加トちゃんケンちゃんごきげんテレビ』の台本の中身。



◀吉本興業の1930年代の京都花月劇場のパンフレット。吉本興業は今年で100周年を迎える。

テレビをつけてジャーニーズ事務所
所のアイドルや、吉本興業のお笑い芸人を見ない日はないでしょう。彼らは毎日、歌、踊り、ギャグを披露したり、バラエティ番組の司会などをしては視聴者を楽しませてくれます。そんな『ジャーニーズ』や『吉本』など、エンターテインメントの研究をしているのが西条昇准先生です。「私は芸能というものを、とくに『ジャーニーズ』『吉本』に注目して研究しています。この二つを追って見ると、エンターテインメントビジネスのシステムや伝統芸能の歴史にも触れられ、理解が深められます。とくに若い人たちは、いきなり伝統芸能からエンターテインメントを理解するというのは敷居が高いと思うので、まずはテレビで気軽に観られるアイドルや芸人を通して知るほうが、親しみやすいでしょう」

「『ジャーニーズ』が元々どんな団体だったか知っていますか? 『ジャーニーズ』は、元々ジャーニーズ多川氏が指導していた少年野球チームだったそうです。あるとき喜多川氏が少年野球チームのメンバーを連れてミュージカルを観に行った際、メンバーが「自分たちもミュージカルをやってみよう」と言ったことから誕生したのが、アイドルグループの『ジャーニーズ』です。当時はまだミュージカルが日本に定着していませんでしたが、アイドルがミュージカルをやることで徐々に定着していきました。現在でも『ジャーニーズ』のアイドルによるミュージカルは行われており、作・演出は喜多川氏自身が手掛けています。毎年恒例のジャーニーズ運動会では野球も行われています。」

お笑い番組の歴史とメディア戦略

西条先生のもう一つの研究対象は、明治末期の1912年に創業された吉本興業です。「エンターテインメントを考えるときにカギになるのはメディアです。現在ならテレビが大きなカギになりますし、その前はラジオがメディアの中心でした。1930年、吉本興業は所属する芸人のラジオ出演を禁じていました。なぜならタダでネタを披露したら、寄席にお客さんが来なくなると考えたからです。しかし、吉本に所属する初代・桂春団治が同年12月にラジオ出演。このことを知った吉本側は激怒しましたが、大衆に受け、寄席に来るお客さんは逆に増えたのです。それが以降ラジオ出演の禁止はなくなりまし

テレビが出現したときは、それに合わせて大阪の梅田花月に『吉本ヴァラエティ』という現在の吉本新喜劇の前身を結成。メディアで芸人を見せつつ、劇場や寄席にお客さんと呼ぶ手法を取ったそうです。現在でもこの手法は継承され、東京にも『ルミネ the よしもと』という劇場があります。劇場を持つっていると、所属タレントをすぐに出演させることができ、新ネタをいち早く披露できたり、タレントとお客さんとの距離も縮まります。最近では吉本ではありませんが『AKB48』のAKB劇場が注目されました。新しいエンターテインメントも、実は昔から続く手法を使っていると言います。

『AKB48』でもお馴染みの手拍子や合いの手の、オタ芸も、すでに明治時代からありました。「娘義太夫」といって、若い女性が物語に伴奏をつけて語る芸能には、ファンの男性がオタ芸のような合いの手を入れていたのです」

今後テレビなどを観るとき、芸能の歴史や成り立ちを知っていれば、少し違った楽しみ方ができるかもしれませんね。